

平成 22 年 6 月 17 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2006～2009

課題番号：18520584

研究課題名（和文） 新羅の伸張と対外関係の考古学的研究

研究課題名（英文） The archeological study of extension and foreign Relation of Silla

研究代表者

定森 秀夫 (SADAMORI HIDEO)

滋賀県立大学・人間文化学部・教授

研究者番号：90142637

研究成果の概要（和文）：加耶は、他地域に比べると、新羅系文物の出土が多い。地理的に新羅に近く、風俗の似通った加耶の併合が優先され徐々に進展していったことが分かった。また、新羅領域内での権力強化も同時進行していたことは、新羅系陶質土器の慶州化で説明可能である。百済・高句麗では新羅系文物がほとんど見られない。半島統一の源泉は唐との連衡によるところが大きであったと考えざるを得ない。倭との関係では、5～6世紀の新羅系陶質土器が大和地域に少なく、むしろ大和以外の地に分布する。倭中枢との交渉は少なかったようである。

研究成果の概要（英文）：There is a lot of unearthing of Silla system products of civilization compared with an other area in Kaya. I found out that merger of Kaya where manners resemble Silla around here geographically was given priority to and was developing gradually. It's possible to explain that power reinforcement in the Silla territory was also synchronized by Gyeongju of Silla system Grey stoneware. Most of the civilization affiliated with Silla is not seen in Paekche and Koguryo. A place by the east-to-west league with Tang cannot but think about the source of the peninsula unification very much. There is few it, and, by the relations with Japan, Grey stoneware affiliated with Silla of five or six centuries is distributed over the ground except the straw mat Yamato in the Yamato area. There seem to have been little negotiations with a Japanese mainstay.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,200,000	600,000	3,800,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：考古学・新羅・対外関係・半島統一・陶質土器

## 1. 研究開始当初の背景

新羅は朝鮮半島の東南部に位置し、地理的には半島統一が困難なように見えるが、その地理的位置とは関りなく、7世紀中葉には半島統一を成し遂げた。文献史料による新羅の半島統一過程の研究は多方面から行われている。しかし、考古資料を使用した新羅の半島統一過程の考察は極めて少ない。

そこで、考古資料の中で最も普遍的に存在している陶質土器を始めとして、装身具などの出土遺物に新羅系要素を認めることができれば、新羅の影響力が一定程度及んでいると仮定することが可能ではなかろうか、と考えた。すなわち、加耶・百済・高句麗での新羅系文物の存在のあり方などを研究することによって、新羅の半島統一過程および対外関係を解明できるという発想で研究を意図したのである。

## 2. 研究の目的

(1)新羅が国力を伸張させ、半島統一へ向かっていく過程で、高句麗・百済・加耶そして倭・中国との対外関係の実相はどうであったのか。文献史料を参考にしながら、主に考古資料を駆使して、新羅の国力伸張と周辺諸国との対外関係の相互関連を総合的に研究することを目的とする。

(2)新羅の対加耶関係は、その地理位置から言っても新羅の半島統一の要となる地域である。加耶地域における新羅系文物の考古学的研究を中心に据えて、新羅の伸長の具体像を結んでいきたい。新羅の対百済・高句麗関係は、その地理的位置から見ると、考古資料のみでは解明できることが限られようが、最大

限資料収集に当たる。対倭関係は、半島統一とは直接には関連しないが、間接的には新羅と倭との国際関係に諸々の影響を与えている。そのことを、日本出土の新羅系文物の研究から推測していくことも目的としたい。

(3)分析に使用する考古資料は、普遍性を有する新羅系陶質土器および装身具などで、それらの出土状況や分布状況を考察し、新羅の対周辺諸国関係を検討してみたい。

## 3. 研究の方法

(1)新羅と周辺諸国(高句麗・百済・加耶・倭・中国)との対外関係およびその中の半島統一過程を、考古学的研究手法で行う。

(2)初年度:新羅と倭との対外関係の考古学的研究

2年度:新羅と加耶との対外関係の考古学的研究

3年度:新羅と百済との対外関係の考古学的研究

最終年:新羅と高句麗との対外関係、新羅と中国との対外関係の考古学的研究、新羅の周辺諸国との対外関係の総合的研究

## 4. 研究成果

(1)半島統一過程での新羅系文物

①小加耶

6前半代には、新羅系陶質土器が古墳からいくつか出土する。

固城内山里8号墳主槨からは、固城タイプ陶質土器とともに、瓔珞付長頸壺2点が出土した。同5槨では出土陶質土器すべてが新羅系高杯である。34号墳では、主槨や封土などから新羅系長頸壺が計2点、21号墳1槨と8槨から新羅系長頸壺が固城タイプ陶質土器

とともにそれぞれ 1 点出土している。また、21 号墳では、1 槨・2 槨や採集品の中に新羅系短脚高杯(中実つまみの蓋を伴う)がいくつか存在する。60 号墳石室からは、新羅系短脚高杯が高霊タイプ陶質土器・固城タイプ陶質土器等とともに出土している。

固城松鶴洞古墳群では、1A-9 号遺構から新羅系無蓋高杯、1B-1 号遺構からは新羅系長頸壺が高霊タイプ・固城タイプ陶質土器や日本の須恵器とともに出土している。

このように小加耶の故地とされる固城地域では、6 世紀前半の新羅系陶質土器が若干数出土しているが、古墳副葬品としては在地の固城タイプ陶質土器が圧倒的であり、大加耶系の高霊タイプ陶質土器も少量存在する状況である。陶質土器以外では、新羅系遺物は確認できていない。

量的には多くはないが、新羅系陶質土器がいくつか出土していることは、新羅との交渉が密であったと考えても良いであろう。特に、瓔珞付長頸壺は新羅地域でも出土例の少ない特殊なものであり、新羅との交渉の密接さを良く示していると思われる。

## ②大加耶

大加耶の中心地である高霊地域では、池山洞 32 号墳から上下交互透孔高杯が出土していた。最近の発掘調査では、4 世紀末・5 世紀初めの上下交互透孔高杯の出土は認められるが、これは陶質土器が新羅系・加耶系に分化していく時点での形態と認識すべきものである。池山洞 32 号墳の上下交互透孔高杯は 5 世紀中葉であり、その段階から新羅との接触が想定されるが、その後は新羅系文物がほとんど出土していず、6 世紀中葉の大加耶滅亡後の新羅系陶質土器の席卷まで、考古資料では新羅との対外関係を推定することはできない。

ところが、大加耶連盟体を構成していた多

羅国とされる玉田古墳群では、大型墳から新羅系遺物が出土することがある。最も重要な遺物は、M6 号墳から出土した金銅製出字形冠である。この形態の冠は、新羅の身分制度を表徴すると考えられるので、この冠の存在の歴史的意義は大きい。玉田古墳群では、そのほかにローマングラスが出土した M1 号墳があるが、ここからは新羅系昌寧タイプ陶質土器や新羅系魚尾形杏葉も出土している。

大加耶を中心とした大加耶連盟は、上記のように一枚岩ではなく、多羅国のように連盟体の中にいながらも、新羅勢力と交渉を有していたことがこのような考古資料から判明した。おそらく、新羅は大加耶連盟が一枚岩ではないことを巧みに利用して、連盟体に楔を打ち込む作業を継続しつつ、大加耶と婚姻関係を結ぶなど硬軟を混ぜ合わせて、652 年の加耶が「叛」するように仕掛けたのではなかろうか。

## ③百濟

陶質土器に関しては、百濟地域での出土例を今のところ確認できないが、半島統一後に新羅系陶質土器に変化を見せていく傾向は加耶地域などと同様の傾向である。

そのように、新羅系文物が非常に少ない中、装身具のうちの帯金具に新羅系のもものがいくつか認められる。最近では、全羅南道長興忠烈里 3 号墳から帯金具のハート形鍔板が出土している。このハート形鍔板は新羅系帯金具であり、百濟地域でいくつか出土していることが確認されている。帯冠具は、新羅の身分制度を表徴するものであり、新羅系帯金具が出土することは、新羅と何らかの交渉を有していたことを示すものと考えられる。しかし、加耶地域のように新羅系陶質土器がほとんど出土していないことから、加耶と新羅との交渉のような親密性は、百濟と新羅の間には無かったと考えられる。

#### ④高句麗

高句麗の版図は、現在の中国東北地方にまで広がっていて、北朝鮮での発掘調査データ以外に中国でのそれを検討対象とすることができる。しかし、現在のところ、高句麗地域での新羅系文物を探すことはできなかった。

むしろ、5世紀段階における高句麗から新羅への影響が、新羅の国力増強の一因ともなったと考えられることの方が、重要であろうと思われる。

#### ⑤倭

新羅系陶質土器は、5世紀～6世紀前半には大和政権の中枢部からはほとんど出土しない傾向が見られる。日本海側・瀬戸内・東海・関東に分布の偏在が見られる。また、新羅系陶質土器の分布と同じように、太環式耳飾や出字形冠などの新羅系装身具は今のところ大和政権中枢部からは出土していない。

以上のような傾向は、新羅と倭との対外関係を示しているようで、文献史学からも言われているように、新羅と倭(中枢部)との交渉はさほど密接ではなく、新羅と倭の地域政権との交渉の存在を示しているように思われる。

#### (2)半島統一後の新羅化

新羅による半島統一が、考古資料で追究できるのが、陶質土器の新羅化という現象である。土器は、普遍的・日常的に存在するものであり、土器が大きく変わるということは背景に大きな社会変動があるということである。

具体的には、加耶や百済・高句麗の地が新羅に併合されると、陶質土器の地域色が薄れ、新羅系陶質土器が席卷する傾向が見られる。特に、6世紀中頃には新羅地域で短脚高杯が盛行し、その形態の高杯が、併合した地域の古墳などから出土するようになる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

① 定森 秀夫 鳴門市土佐泊の新羅神社—山典還暦記念論集『考古学と地域文化』査読無 2009年 803-808頁

② 定森 秀夫 京都府城陽市出土把手付短頸壺 季刊韓国の考古学 査読無 第13号 2009年 98-101頁

③ 定森 秀夫 山形県出土陶質土器 季刊韓国の考古学 査読無 第12号 2009年 110-113頁

④ 定森 秀夫 愛媛県出土新羅系陶質土器 季刊韓国の考古学 査読無 第11号 2009年 106-109頁

⑤ 定森 秀夫 日本列島出土の咸安タイプ系陶質土器 下條信行先生退任記念論文集『地域・文化の考古学』 査読無 2008年 369-386頁

⑥ 定森 秀夫 愛媛県出土加耶系陶質土器 韓国の考古学 査読無 第10号 2008年 110-113頁

⑦ 定森 秀夫 愛媛県出土百済系陶質土器 韓国の考古学 査読無 第9号 2008年 106-111頁

⑧ 定森 秀夫 三重県出土陶質土器 季刊韓国の考古学 査読無 第8号 2008年 100-105頁

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

定森 秀夫 (SADAMORI HIDEO)

滋賀県立大学・人間文化学部・教授

研究者番号：90142637